

【從兄の睡眠調教】勝手に開発された、私専用の快樂地獄

サンプル（一部抜粋）

「……すごいな。どんどん溢れてくる。

もう…俺がいないと……」

低く聞き心地の良い声が聞こえてくるけれど、何を言っているかは聞き取れない。ただぐちゅぐちゅと激しい音だけが響いている。太ももの内側を愛撫されるような、割り込んでくる指のあたたかさ。

ふわふわして気持ちいい…なんか…変な感じ。

……

「…沙織、目覚まし鳴ってるよ。」

ぽんぽんと肩を叩かれる感覚…

「んー…」

ゆっくりと目を開けると、整った綺麗な顔が視界に入った。

「あ、駿くん…」

ピピピッと響くアラームの音。困ったような表情で私を起こす駿くんの顔…。

「起きた？」

「うん…」

「朝ごはん出来てるよ。顔洗ってリビングにおいで。」

駿くんがそっと私の頭を撫で、部屋から出て行った。

駿くんはお母さんのお姉さんの息子…つまり私にとって従兄だ。駿くんは昔から完璧な人で、とにかく優しくてなんでもできる。

そんな駿くんと私は約1ヶ月前から同居している状態だ。どうして従兄と同居しているのかというと、私が長期出張中だから。就職がなかなか決まらずに、なんとか採用してもらった会社は結構ブラックな会社で…ある日突然

「明日から3ヶ月支社に行つて。」

なんて社長に言われてしまつて…。もともと一人暮らしをしていた家からは通勤に3時間もかかるし、さすがに急に引っ越しも出来なくて…。結局支社の近くに住む駿くんの家にお世話になる事に決まつた。

駿くんとは昔から仲良しだし、抵抗もなく転がり込んだ感じた。

それが誤りだったと気づかずに。

(中略)

「ねえ、駿くん。」

「ん？」

「ちよつとパソコン借りてもいい？」

資料作りだけ見直してから映画見たくて……」

「……」

一瞬、駿くんの目が見開いた。

「……だめ？」

不思議に思いながら首をかしげると、駿くんはすつと目をそらし、何かを考えてニコツと微笑んだ。

「……いいよ。」

俺、洗い物が終わったらちよつと出かけるから、自由に使っているからね。」

いつもと同じ穏やかな表情。だけど……どこか少し違和感があった。なんだろう……言語化できない違和感なんだけど、笑顔が不自然……？貼り付けたような感じ……？笑顔の奥の瞳だけが、じつと私の唇のあたりを観察するように冷たく光ったような。難しいけれど、いつもとは違う気がした。

「ほんとに……借りて大丈夫……？」

「うん、大丈夫だよ。」

多分さっきの違和感は……ただの勘違いだろう。自分の違和感を頭の隅に追いやり、パソコンへと向かった。

もしこの違和感を無視しなければ、あんなものを見る事もなかったのに。

(中略)

だけどその時、画面の右端にちらっとファイルが置かれている事に気づいた。

「ん？」

ファイル名は『沙織』……。

「私……？」

不思議に思いながらファイルを開いた。中には動画が何本も入られていて、画面は真っ暗だった。

「……？」

一番古い動画を興味本位でクリックした。

始まりは真っ暗な画面。ガサツと何かが動く音だけが響く。その画面が数秒続いたあと、ライトをつけたようで、画面がパツと明るくなった。

「え、駿……くん？」

画面に映ったのは私の部屋と、そこに立つ駿くんの姿。いつものような優しい笑顔はなく、冷たく支配的な……肉食獣のような視線。その視線はぐっすりと眠っている私へと向けられていた。

「…何…してるの…？」

動画の中の駿くんに話しかけたって、どうにもならない事は分かっていたけれど…異様な雰囲気と言葉を発さずにはいられなかった。

『…沙織。』

画面の中の駿くんが眠っている私の足元にそっと近寄る。

『俺だけの沙織。』

低く響く愛おしそうな声。ゆっくりとパジャマの中へと手を滑り込ませる。

『…眠る時は下着つけないもんね。助かるよ。』

低く笑いながら紡がれる言葉…。私の服の中に忍び込む手が胸のあたりまで登っていく。

『…ん…』

眠ったままの私が、小さな声をあげる。

『…乳首、気持ちいいんだ？ほら、俺の指にいじられて、立ってきたよ。』

(中略)

画面の中で駿くんがしているように、左右に指を小さく動かす。その瞬間に電流が流れるようにピリピリと快感が体を駆け巡る。

「っ…ふ…あ…あ…っ」

勝手に漏れる声。動画の中の私の声とシンクロする。この動画の女性の声は間違いなく…私だ

と突きつけられた気持ちだった。

『音、聞いててね。』

駿くんがにやつとしながら、じゅるじゅる激しい音を立てて眠っている私のクリトリスを吸い上げる。

『んああああ…っ、あ…っ…は…』

眠っている私の体がのけぞる。それを見るだけでクリトリスが熱を持ち、じゅわつと勝手に疼いてしまう。

クリトリスを弄る指を早め、動画の中のように駿くんの舌に弄られている感覚を想像する。

眠っている間に開発されてしまった体に絶望する。所詮、私の指は私の指でしかない。気持ちいいのにその先にはいけない。

「…あ…なんで…嫌なのに…」

指が止められない。

『沙織。次は中だよ。』

夢中になってクリトリスを弄る私を制止するように、駿くんの声が響く。

「中…?」

中指をゆっくりと私の膣へと挿入するのが見える。優しく傷つけないようにゆっくりと…。

(中略)

私の知らない私の体は…いつの間にこんなに淫らに改悪されたのだろうか。

「……」

ごくつと生唾を飲み込む。

…試すだけ。この動画が…駿くんが言っていることが事実か…確かめるだけ…。

無理やり作った言い訳を頭の中にいくつも流す。じゅぽつと自分の中から指を抜いて、足をおろし一番下の引き出しへと手を伸ばした。

恐る恐る開けた引き出しには…本当に動画の中と同じ電マが入れられていた。

「…っ」

息を飲み、電マを手取る。

冷たい…。私の少し汗ばんだ手とは違う温度。

先端についたコードをさし…ぽちつとスイッチを入れた。途端にブーつと激しい音とともに振動する電マ…。

これを…アソコに…？

（中略）

「……」

動画の通りにしたら…動画の中の私みたいに気持ちよくなれるのかな…

私は駿くんの真似をして、クリトリスに少し触れるくらいの強さで電マを押し当て…中指を膣

へとそつと挿入した。

「んう…あ…ああ…は…っ」

気持ちいい、クリトリスにもつと刺激がほしくなる。中、どこが良いところなんだろう…わからないけど…どんどん淫らな液が溢れてくる…。

パイプに水滴がついて振動の音が生々しく変わる。そんな小さな変化だけで、体の底がふわふわと浮遊しそうな感覚。

「あ…なんか…あ…っ、んんっ」

ぞくぞくと体の奥から何かが上がってくるような…

「…気持ちいい？」

びくつと体が跳ねる。だって後ろから…低い声が聞こえたから。

「え…？」

慌てて振り返ると、にこつと微笑んだ駿くんがそこに立っていた。

「え、え…」

震える電マは私の手から離れ、床へゴトつと重い音を響かせ落ちた。広げた足は即座に閉じ…無意味に手で隠す。

うまく言葉が出てこないほど…恥ずかしくてみじめだった。

「…夢中になって…玄関のドアの音すら気づかなかったんだね。電マのせいかな。」
駿くんはそつと私の頭を撫で、そのまま首筋へと手を滑らせた。

「や…」

「嫌じゃないでしょ？自分が犯されている動画を見て、オナニーをするくらいなんだから。」
くすつと笑う駿くんの目は…優しさなどなかった。

（中略）

「3秒あげようか？」

「3秒…？」

「うん。3秒以内に俺から逃げられたら…もう手は出さないであげる。」
少し悲しそうな顔…。覆いかぶさつてそつと髪を撫でられる。

「駿…くん…」

「…逃げていいんだよ。」

ちゅつと軽くキスをされる。

「じゃあ数えるね。3…」

逃げていい…。逃げるなど言われるよりも、ずつと逃げにくい。

「ずるい…よ…。」

寂しそうな顔…愛されてると認めざるを得ない手つき…。

「2…」

逃げなきゃ…。逃げなきゃ犯される。駿くんに壊されちゃう…。
見つめないで…。

「1…」

「…っ、駿…くん…壊さないで…」

「…0」

駿くんの瞳からスッと光が消えた。

（全容は製品版にて）